

地域情報（県別）

【千葉】「Dr.コトーになりたい」自分の命救ってくれた医師に憧れ-長谷部圭亮・横芝光町立東陽病院医師に聞く◆Vol.1

地域医療担う医師目指し、学生時からエキスパートに師事

2025年7月14日（月）配信 m3.com地域版

学生と一緒に地域の課題を抽出する研究を行い、コミュニティナースのチームを立ち上げて病院の外で住民と触れ合う。行政の会議体にもメンバーとして参加する――。そんな多彩な地域活動を展開する32歳の医師が千葉県にいる。横芝光町立東陽病院の長谷部圭亮医師は子どもの頃から「Dr.コトー」に憧れ、学生時から自分の目指す医師像に向けて研さんを重ねてきた。ユニークな若手医師の半生をたどった。（2025年6月2日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



長谷部圭亮氏（本人提供）

生後すぐに重度の黄疸、NICUで一命を取り留める

――資料によると、長谷部先生は自治医科大学を卒業後、千葉県の複数の医療機関に勤めてきたとあります。まずは、医師を志した経緯をお聞かせください。

「お医者さんってカッコいいな」と、子どもの頃から憧れていました。私は生後すぐに重度の黄疸などが起き、NICUでの集中治療で一命を取り留めました。物心ついてから当時のことを親から聞いたほか、その後も中耳炎や副鼻腔炎を繰り返すなどして地域のかかりつけの先生によく診てもらっていたので、幼少期から医療が身近にありました。

高校の頃には医師への思いがさらに高まり、自分のなりたい医師像と照らし合わせて進学先を決めました。私は小さな頃から「Dr.コトー」のような医師に魅力を感じていました。高度な医療技術を持ちながらも、地域住民と近い距離で接し、患者さんの思いや価値観を共有しながら診療する医師です。千葉は全国でも特に医師が足りていないため、県内の医師不足の地域に貢献したいと思い、地域医療を担う医師を育てる自治医大に進みました。

「高い診断力とEBMが重要」大学6年から重点的に学ぶ

——現在は横芝光町立東陽病院に勤務していますが、大学卒業後はどのようなキャリアをたどったのですか。

2017年に自治医大を卒業してから国保旭中央病院で初期研修を受け、君津中央病院大佐和分院で2年間、地域医療に携わりました。その後、国保旭中央病院に戻ってアレルギー・膠原病内科に在籍し、後期研修を受けました。東陽病院に入職したのは医師7年目の2023年で、現在は内科の外来で幅広く診療しているほか、在宅医療も行っています。

私は学生の頃から、自分の目指す医師像を踏まえて、総合的に質の高い医療を地域で提供するにはどうすれば良いか考えてきました。そして、それを実現するための要素が二つあると考えました。一つが高い診断力、もう一つがEBM（Evidence-Based Medicine）です。これらの技術を養おうと、大学6年の頃から学んできました。

「感染症を深掘りしたい」と矢野晴美氏に師事

——診断力とEBMの向上のため、具体的にどう研さんを積んだのですか。

的確に診断し、必要に応じて専門医につなげること、医療の道筋をつくるのが地域医療を担う医師には重要だと思います。私の学生時には千葉大の総合診療科が注目されるなど診断学が盛り上がりを見せており、私も関心を覚えました。中でも興味を抱いたのが、不明熱です。発熱が続いているものの容易に診断がつかない状態を突き止めていくプロセスに興味があり、その原因領域として、感染症、膠原病、悪性腫瘍の三つが多いことを知りました。そこで、まずは感染症を深掘りしたいと思い、この分野の権威である矢野晴美先生に連絡して研修を志願しました。

矢野先生は米国で感染症の専門的なトレーニングを受けた後に帰国し、自治医科大学臨床感染症センターの准教授や筑波大学医学医療系の教授を務め、現在は国際医療福祉大学医学部の医学教育統括センターと感染症学の教授を兼任しています。東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の理事としての貢献が評価され、米国内科学会の「女性医師賞」も受賞しました。大学6年から矢野先生に師事し、医師3年目には毎週のように通いました。また、研修医時代には「研修医の研修医による研修医のための勉強会」をコンセプトとした「Resident GIM」を共同で立ち上げた経験もあります。

EBMのスキル向上に向けても、大学6年から全国のエキスパートの先生方にご連絡して訪問し、先生方が重視する考え方を聞きしたり、実際に診療を見学させていただいたりしました。「EBM」というと、エビデンスとなる論文に目が向きがちであるように思います。確かに信頼できる情報は大切ですが、それはあくまで患者さん個々の状況や価値観を尊重した上で有効的に発揮されるもの。先駆者の先生方にEBMのコアであるコンセプトを学んだことも、現在の診療に生きています。

——後期研修先の国保旭中央病院でアレルギー・膠原病内科に在籍したのは、先ほどの「診断が難しい病気」に挙げられるからでしょうか。

そうですね。矢野先生に師事して感染症の診断力は高まったのですが、自分の中で膠原病の診断・治療には腑に落ちないところがあり、「一度どっぴりつかりたい」と感じていたんです。そこで、旭中央では同科に在籍して膠原病とリウマチを専門的に学び、リウマチ専門医を取得しました。

振り返ると、旭中央に勤務した経験が総合診療医としての核をつくってくれたように思います。同院は千葉県北東部と茨城県南東部の広い診療圏をカバーする基幹病院であり、いわゆる“最後の砦”として、24時間救急患者を受け入れています。患者数はとても多く、私が初期研修医だった頃は働き方改革が行われる以前だったこともあり、寝る間を惜しんで急患対応に努めました。この時のハードな経験があるからこそ、今、自信を持って地域医療を実践できていると思いますし、公立病院に勤める医師としての責任感も養われました。

——そんな曲折を経て、2023年に東陽病院に入職したんですね。

私としては満を持しての赴任でした。「的確な診断とEBMで質の高い地域医療を」というテーマを胸に学生時から医療を追求してリウマチ専門医も取得。「一人でもある程度はやれる」と、そんな気概でいたのです。しかし、東陽病院への入職直後にある患者さんと出会ったことで、壁にぶつかりました。「医療の枠組みだけでやることには限界がある」。そう痛感したことが、病院の外に飛び出し、地域で活動している現在につながっています。

◆長谷部 圭亮（はせべ・けいすけ）氏

2017年自治医科大学卒。国保旭中央病院での初期研修後、君津中央病院大佐和分院を経て、国保旭中央病院のアレルギー・膠原病内科に在籍して後期研修を修了、リウマチ専門医を取得。2023年から横芝光町立東陽病院に勤務しており、診療だけでなくコミュニティナースと一緒に地域活動にも取り組む。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

